なし輪紋病の新しょう及び果実への感染時期						
［要約］なし輪紋病の新しょう及び果実への主な感染時期は、５月上旬から７月上旬で、それ以降は感染率が低くなる。品種では幸水は罹病性である。						
長崎県果樹試験場・病害虫科	専門	作物病害	対象	果樹類	分類	指導
平成５年度長崎県果樹試験場業務報告 1994年九州病害虫研究会　第40巻（投稿中）						

［背景・ねらい］

なし輪紋病は黒斑病や黒星病に次ぐ重要病害で、幸水、豊水などの無袋栽培の増加とともに、本病菌に感染した果実が市場や店頭で発病し、問題となっている。

そこで本病菌の柄胞子飛散消長と新しょう及び果実への感染時期を解明し、防除時期を明らかにする。

［成果の内容・特徴］

①新しょうへの感染は５～９月まで見られるが、その中でも６月が最も多く、病斑は感染１～２か月後に形成される（表１）。有傷処理を行うと無傷より病斑数が急増する（表２）。

②新しょうにおける病斑の発生位置は、新しょうの先端部に集中して認められるが、樹皮が硬化したところでは認められない。２年生枝での病斑は、節や短果枝、発育枝の基部に発生する。

③果実への感染は５月中旬から７月上旬に多く、それ以降は発病率が減少する。しかし果実成熟に伴い、傷口から感染すると急激に発病する。

④新しょう及び果実の罹病性は、二十世紀より幸水が高い（図１）。

⑤以上のことから、西南暖地における本病の主要な防除時期は５月上旬から７月上旬で、収穫直前に台風など強風雨が予想される場合は、この時期にも薬剤散布が必要である。

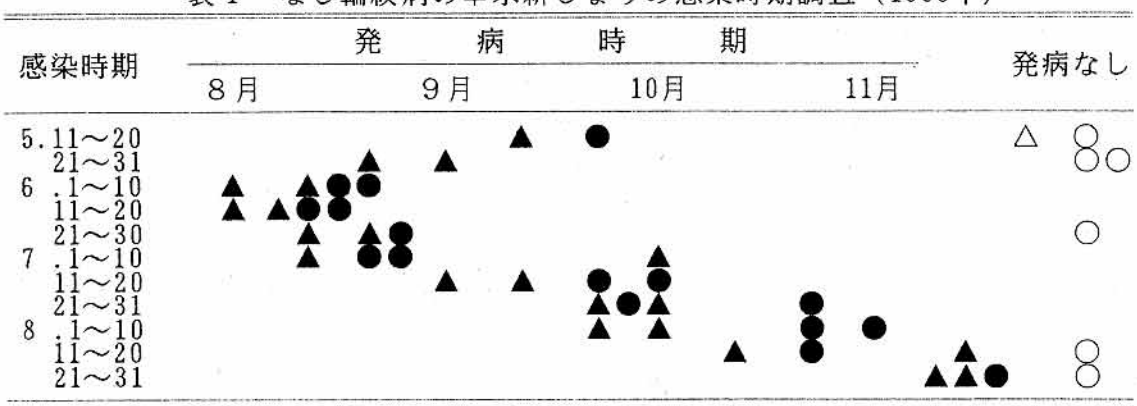
［成果の活用面・留意点］

①感染時期が長いので、幼木では新しょうへの感染防止、成木では果実への感染防止を主体に、薬剤の散布時期を検討する必要がある。

②強風雨による新しょう及び果実の傷害の発生は、本病の多発を助長するので、防風垣の設置や整備を十分に行う。

［具体的データ］

表１　なし輪紋病の幸水新しょうの感染時期調査（1993年）



▲：有傷発病樹、●：無傷発病樹、△：有傷無発病樹、○：無傷無発病樹

表２　幸水の新しょう感染１枝当たりのいぼ病斑数

処理樹	感染時期			
	5.11～31（個/枝）	6.1～30（個/枝）	7.1～31（個/枝）	8.1～31（個/枝）
無傷樹	0.4	9.1	0.6	0.3
有傷樹	1.9	36.0	8.0	0.5

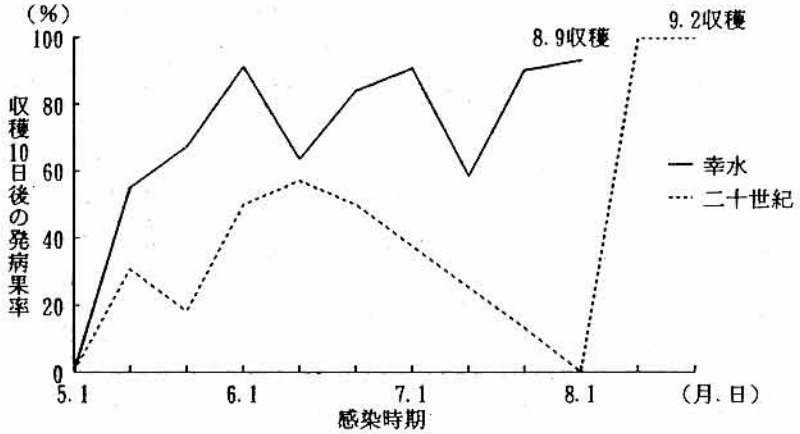


図１　なし輪紋病の品種別果実の感染時期（1993年）

［その他］

研究課題名：なし輪紋病の発生予察法の改善試験

予算区分　：国庫（特殊調査）

研究期間　：平成５年度（平成１～５年）

研究担当者：古賀敬一、森田昭、織田拓、大久保宣雄

既発表論文等：なし輪紋病の新しょう及び果実への感染時期、九州病害虫研究会、第40巻（投稿中）、1994.

残された問題点：幼木では新しょうへの感染防止，成木では果実への感染防止を主体に，薬剤散布の実証が必要である。